国際高分子化学シンポジウムにご協力を

原 田 珍 重*

待望の国際高分子化学シンポジウムもいよいよこの秋に迫りました。このシンポジウム開催の経緯、目的、意義、その効果、わが国高分子化学の研究に及ぼす影響などについては、早くから関係各位から懇切ていねいに報ぜられていますが、特にその中でも1964年3月の桜田会長による開催趣意書、ならびに「高分子」第14巻 第158号に掲載せられた本大会委員長大屋晋三帝人社長による「1966年国際高分子化学シンポジウム開催にあたり」に詳細述べられているのでいまさら私からくり返す必要はありません。

すなわち、この大会は現代の最もはなやかな脚光を浴びている高分子化学について、世界第一流の知識を総動員して日本に進駐(?)してくる唯一無二の機会であるので、関係者一同は何をおいてもこの大事業に協力して、成功裏に終始させねばならない一大行事であります。

ことに今回はこれまでにない多数の学者研究者、すなわち1200人に余る大参加者を得、発表論文も450を超える盛況となり、科学委員会はその発表時間の配分に苦慮している状況であり、おそらくこれまでの世界各地における10回のシンポジウム中最大の規模になろうとしています。このことはとりもなおさず現代の高分子化学研究の発展を象徴していることになり、反面わが国の同研究の旺盛さを示し、世界の学者業者の注目するところとなっている証左であって私共関係者の最も誇りとしてよいことと思います。

そしてこの重大なシンポジウムの受入態勢はどうでしょうか。主催の高分子学会としては組織委員会と科学委員会を設け、諸外国における実際状況も詳しく調査して、それぞれの分担において着々準備を進めつつあります。すなわち科学委員会もっぱら本大会の学術関係の運営につき、そして組織委員会は大会の一般運営について各委員は日夜涙ぐましい労苦を重ねております。私は組織委員会の促進委員の一人としてもっぱら資金確保に力を注いでおりますが、前記のように世紀の大会である意味からも、わが国関係者すべてが、その全力をあげてこの大会を成功せしめる努力を協せることが最も大切なことと考えます。すなわち各大学の担当学者、各会社の研究者はもっぱら科学委員会においてその内容を最も豊かなものにするために、これまでにない絶大な協力裏に着々整備を進行させています。一方必要資金については幸い国家もこの大会の重要性を認識して、大蔵省は寄付金の免税を認められ、通産省工業技術院も国費をもってその一部を補助されております。その上本大会に最も縁の深い化学繊維協会におかれては募資金額の $\frac{1}{2}$ に相当する1,500万円を寄贈されておりますので残りの $\frac{1}{2}$ 1,500万円はぜひとも関係産業、すなわち紙、パルプ、塗料、ゴム、プラスチック、石油化学などの業界からのご寄付を得たいものと存じ、各方面へご協力をお願いしております。

会長もいわれるごとく、日本におけるシンポジウムの開催は単に経済関係のみならず、いろいろな点で日本の高分子関係者の大きな負担であるには違いありません。しかしそれによって日本の国際的義務を果たすとともに、わが国の研究を世界に誇示し、また海外の権威者に直接接触して討論を交えることを得て、強大な刺激と示唆とを得、わが国高分子化学の研究にまたその工業にエポックメイキングに寄与するものがあることを信じて疑いません。そのために全国関係者の絶大なご協力を得たいものであります。

研究者はその能力と成果を、事業者は資金を、そしてそれらが表裏一体となった協力が明日のわが国の繁栄を生むものと確信いたします。

* Yoshishige HARADA 国際高分子化学シンポジウム促進委員会委員長・住友ベークライト株式会社社長